

令和3(2021)年度入学試験問題出題のねらい・解答例 (学校推薦型選抜)

中村学園大学〔教育学部〕

【小論文】

〈出題のねらい〉

本小論文の出題にあたっては、教育学部としての特色に鑑み、子どもたちの「居場所」をテーマとする題材を選択した。今日、「子ども食堂」や「無料塾」等、子どもの貧困に関わる支援活動や事業が全国各地で展開されている。子ども達の生活や学習支援に関わる、重要な活動等ではあるが、根底に据えるべき重要なことがあるのではないだろうか。それは、児童生徒の問題行動について、いじめや不登校、引きこもり等、相変わらず発生しているからである。そこで今回、将来教育者を目指す受験生に、子どもの本当の居場所とするための要件を読み解き、家庭や学校、地域の公共施設等、子ども達が過ごす沢山の場（空間）の在り方についての考えを持つ機会となればと思い、出題した。

問1では、「地域の教育力に関する実態調査（平成18年）」の結果から、小・中学生の放課後・休日の過ごす場所について把握し、文章に記述できるかを問う形式としている。まず、「学校のある日の放課後に過ごす場所」「休日に過ごす場所」のグラフの結果から、「ひとりで」「みんなで」の割合の高い項目をチェックする。次に「学年によって回答割合に大きな違いが出た場所(学校のある日の放課後)」で学年による違いを確認する。すると、過ごす場所の共通点と、学年が上がるに従っての相違点が明らかとなる。この二点を的確に記述できているか否かを評価している。

問2では、文章を要約し、グラフ及び文章から自分の考えを述べることを問う形式としている。問題文の著者は、子どもの「居場所」の条件には主観的条件と客観的条件という二つがあるとしている。そこで主観的条件と客観的条件、二つの条件の関係について要約することとなる。この要約とグラフの結果から、子どもの「居場所」について、「主な場所（空間）」における「関係性」の重要性について触れ、自分の考えを記述できているか否かを評価している。

〈模範解答例〉

問題1

ひとりで過ごす場所も、みんなで過ごす場所も、自分の家かともだちの家であり、子どもは多くの時間を屋内で過ごしている。高学年ほど学校で過ごし、低学年ほど自分の家や公園・原っぱ・空き地で過ごす割合が高い。(99字)

問題2

子どもの居場所を成立させる条件には、主観的条件と客観的条件の二つがある。主観的条件とは、本人自身その場を「居場所」として感じていることであり、安心でき、心が落ち着き、その場にいる他者から受容されていると主観的に感じている状態を指す。ついで、客観的条件とは、自身のことを受け入れてくれる他者がその場に存在していることである。安心やくつろぎなどの感覚、自己を肯定する感情などを持つには、自分を承認してくれる他者の存在が必要である。子どもの居場所としては、自宅・友人の家・学校・公園など、様々な空間的な場が考えられるが、そのいずれにしても、自己の存在を認め、受容してくれる人がいなければ居場所とはなりえない。そのため、居場所をつくったり、提供したりする際には、単に物理的な場だけを指すのではなく、その場にいる人々との受容的、相互承認的な関係性が必要条件であることを忘れてはならないだろう。(392字)